

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/>

目 次

第5回東海地区 CSI 事業報告会について ……	1
青木正児特別展を終えて	
- その“文芸”のフォルム ……	3
永井文庫（近代イギリス経済学史・思想史）について	
- 概要と保存対策 - ……	6
「館長と話そう！2007」への	
図書館の対応について ……	8
利用者から見た図書館 ……	9
本学教員著作物の寄贈リスト・自著紹介 ……	10
豊田講堂改修竣工記念貴重書展示会を開催 ……	11

第5回東海地区 CSI 事業報告会について

平成19年11月30日に名古屋大学附属図書館、名古屋大学情報連携基盤センター、国立情報学研究所の共催で、第5回東海地区 CSI 事業報告会（次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業）が開催されました。

国立情報学研究所は現在、大学等と連携しながら「最先端学術情報基盤（Cyber Science Infrastructure : CSI）」の構築を進めています。東海地区 CSI 事業報告会は、その構築事業への理解を深めること、各機関と情報交換・意見交換することを目的として、名古屋大学において開催しているものです。今年度はネットワーク系の報告会として、第4回「ネットワークとセキュリティ」、第6回「グリッドコンピューティング」も開催しています。

学術機関リポジトリを中心とした第5回は「学術機関リポジトリの今後」と題し、異なる立場の4名の講師による講演とパネルディスカッションが行われ、東海地区を中心に全国から79名（うち学外者54名）の参加がありました。

「CSI 事業の今後の展開」

安達淳国立情報学研究所学術基盤推進部長からは、まず CSI 事業の全体像と、具体的な成果についての紹介がありました。日本の学術機関リポジトリは66機関に達し、世界において存在感を強めてきているとのこと。コンテン

ツの収集・提供に関する「領域1」の具体的成果として、北海道大学で行われている研究者から学術雑誌掲載論文の提供を受けるための工夫の数々や、信州大学で実現した業績データベースとの連携機能、地域での共同リポジトリを構築している広島県の事例などが紹介されました。

先端的な研究開発事業を推進する「領域2」においては、学術機関リポジトリのコミュニティを構築し、情報共有を進めている DRF (Digital Repository Federation) の活動と、学会のオープンアクセスに関する方針を調査・公開している学協会著作権ポリシーデータベースの活動が紹介され、今後どのようにこれらの活動をサポートしていくべきかが課題とされました。

また学術機関リポジトリのポータルである JuNii+ の活用事例として、宮崎大学の OPAC が取り上げられました。OPAC と JuNii+ をマッシュアップして、図書の検索結果にあわせてリポジトリに収録された関連論文を表示させる機能を提供しています。学術機関リポジトリのプロジェクトを立ち上げたときには理念的なところから始めたが、検索の中で具体的に効用が体感できる段階に来ているとの指摘がありました。

今後の課題としては以下の6点にまとめられました。

1. 安定的な財政基盤の確立：大学の中で経費をどのように確保していくか
2. 全国的な展開：どう裾野を広げるのか
3. 学術機関リポジトリの質の向上：利用者の視点に立った評価の必要性
4. 重点コンテンツ：利用者からの評価も踏まえたコンテンツのバランス
5. コミュニティのあり方：今後の展開
6. eサイエンスとの連携：データ共有とリポジトリの関係

「学術機関リポジトリの将来」

伊藤義人名古屋大学附属図書館長の講演では、最初に学術情報流通の変革について概要説明がありました。オープンアクセス運動が展開し、各国で新しい学術情報の流通経路をつくる試みがされており、そういった動きを反映して、WEB上の存在感から大学を順位付けしたランキングも生まれているとのことです。

しかしながら学術機関リポジトリには現実的課題が決して少なくなく、経費の問題や教員の協力を得ることが簡単ではないこと、学会との連携の重要性や商業出版社との新しい関係も模索段階であり、リポジトリに登録・公開されることで研究における倫理問題が顕在化する場合があることも指摘されました。

一方、学術機関リポジトリの将来に関しては、研究のスタイルやワークフローが大きく変わりつつあること、その中で大学図書館は大学コミュニティのハブとなって新しい価値を生み出すべきであること、学術機関リポジトリはそうした新しい研究サポートの一部でもあるだろうとされました。

また、学術情報流通の危機的状況を打開するための中長期の方策として、学術機関リポジトリを電子出版のプラットフォームとして発展させることの提案がありました。

商業出版社の立場から

エルゼビア・ジャパン株式会社の高橋昭治氏からは、「商業出版社の考える学術情報サービスの将来」と題して、学術雑誌出版社の立場で考える学術情報サービスの多面的な展開について報告がありました。商業出版社にとって大学

図書館は顧客であり、その顧客の地位向上に寄与するため、原則としては学術機関リポジトリを支援する立場であるとのことです。今後の優先項目としては、ジャーナルの品質・価値を高めることを第一として、さらにコンテンツ以外のサービス、例えば科学コミュニティのためのソーシャルブックマークサービスなど(www.2collab.com)、研究者の研究効率を向上させる試みを始めていると紹介がありました。

トムソンサイエンティフィックの渡辺麻子氏からは、「商業出版社が考える学術情報流通の将来」として、学術データベース提供会社の立場から学術情報流通の将来像が紹介されました。まず、情報爆発のなかで、研究者を最速で効率よく必要な情報に導くことを目指していると自社の立場を明確にしたうえで、そのため従来の文献検索に加え、論文投稿までの研究ワークフロー全体に関わるサポートを展開していくと説明がありました。またWeb Citation Indexを開発し、学術機関リポジトリなどWEB上のコンテンツの引用関係を明らかにし、学術機関リポジトリに論文を登録する意義を高めることにも貢献したいとのことです。

パネルディスカッション

引き続き、4名の講師をパネリストとした、川瀬正幸名古屋大学附属図書館事務部長の司会によるパネルディスカッションが行われました。

印象に残ったやりとりを紹介します。フロアからの質問で、高橋氏と渡辺氏に学術機関リポジトリに対する見解が求められました。それに対し高橋氏からは、学術出版社の根幹は学術情報を広く普及させることであり、競合する部分はあるがサポートはしていくとの発言がありました。また渡辺氏からは、科学世界で起きていることを映す鏡となることを目指しており、学術機関リポジトリが今後、研究者コミュニティとどう関係をつくっていくか注意深く見守りたいとの言葉がありました。

学術機関リポジトリには、商業出版社への対抗軸といった側面もあるわけですが、それは敵対のための敵対ではありません。学術研究の推進を実現するため、今後、何らかの一致点が両

者のあいだで見いだされるべきではないか、そんなことを考えさせられる議論となりました。

(文責 次良丸 章
じろまる・あきら 情報システム課課長補佐)

「青木正児特別展を終えて—その“文芸”のフォルム」

加藤 国安

10月1日(月)～19(金)にわたり、附属図書館2007年秋季特別展として「『遊心』の祝福—中国文学者・青木正児の世界」が開催された。青木正児(あおき・まさる 1887-1964)とは、中国文学の権威・吉川幸次郎博士の『青木正児全集』十巻「完結の辞」にこう語られている。「中国文学研究が独立した一科の学となったのは、著者(注:青木のこと)がもっともの画期である。…旧漢学からの脱皮というそのことにつき、もっとも決定的な態度は、著者においてはじめて見る。」まさにわが国の近代中国文学の草創期の大恩人である。

その青木正児の蔵書・資料が本学に所蔵されることになったのは、青木が京都帝国大学教授だった時の最後の学生で、のちに本学中国文学講座に奉職した水谷真成元教授(1917-1995)による、青木家への強い働きかけがあったからである。努力の甲斐あり、昭和49年、そのほとんどが一括して本学附属図書館に寄贈されることとなった。その数、「目録」の件数にして343点、個々の資料まで細かく数えると、およそ千数百点。その中から、今回、とくに重要と思われるものを百点ほど選び展示した。(写真1)

青木学の特色は、曇りのない純真な心で中国



写真1 展示室の様子(10月13日)

文化をこよなく愛した点にある。ナショナリズムの旋風が吹き荒れた大正・昭和前期、時流に流されず世に媚びず、「職業気や商売気を離れた遊心の境涯から(する)、…真に百世に伝ふべき大芸術」(「解衣般裊の芸術」)の研究と啓蒙に誠心誠意尽くした。遙かなる中国文化に舞い遊んだ青木には、国家的壁を越えて多くの知人がいた。魯迅や王国維・胡適といった近代中国を代表する錚々たる文人らである。そんな青木の学識や人品が信頼されてのことだろう、川端康成や土岐善麿らの文人とも親しい付き合いがあった。青木が、まさに国際派文人だったことを示すものである。そうした青木博士の足跡や人間性を振り返る特別展が、今日の人々にどれだけ受け入れていただけるか、正直言ってたいへん危惧した次第である。

しかし、期間中好天に恵まれたこともあり、また同時期に本年度の日本中国学会がわが名古屋大学で開催されたこともあって、参観者は計628人(うち学会関係者は261人)に上った。専門家の参観はともかくも、その半ばが一般市民だったことも私たちに大いに驚かせた。中国古典の世界が、かくも多くの市民の関心を引いたことは予想外のことだった。

参観者のアンケートを拝見させていただくと、「非常に行き届いた説明がなされ、どれだけ深い研究と調査がなされているかがよく分かり、感激感激の連続でした。」

「青木正児博士の交友関係をはじめとして、未知の資料を拝見できてよかった。北京滞在時の絵画によって、時代の風俗はもとより青木博士の関心の所在を再確認できた。」

「青木の頭の中が見えたようで楽しかったです。」

「大学図書館内での展覧会で、このような

質の高い広告媒体を作っていることに驚きました。」

「戯単、門票、鶏肋の全ページがコピーで見られたのはありがたかった。できれば「紀要」などで復刻して欲しい。図録はたいへん優れていると思った（500円では安すぎか）」などとあり、この企画に携わった一人として苦勞の甲斐があったと、まことに感無量だった。

この特別展でとくに印象的だったことを一二紹介する。まず青木の重要な業績たる「北京風俗図譜」（東北大学図書館蔵）を期間中、展示させてもらえないかという案が持ち上がった。これについては中央図書館の担当者が腐心し、さまざまな努力を重ねられた。現物の借用は運送コストが高すぎて断念。ならばと、今度は写真の借り出しを模索。加藤が仙台に赴き事前調査をした上で、ポジ四枚を借用せよと、次にはそれを原寸大のパネルに制作するのに、また一苦勞。業者との協議の時の担当者の表情はまさに真剣そのもので、一ミリをめぐって議論するその厳密な態度に、プロとしての心意気を感じたものである。おかげで展示室に飾られたパネルは、ひときわ光り輝いて見えた。

もう一つは、青木の自編「戯単」(写真2)「門票」「鶏肋」の全ページの資料公開についてである。なにせ貴重な資料だが、傷みも少しずつ始まっている。しかし研究者にとっては、ぜひ内容を一点一点確認したいものばかりである。そこで私は、封筒に入っているものはすべて一枚一枚開き、折りたたまれているものもすべて丁寧に開いて、写真複製を作って展示することを提案。これに対して、図書館側も熱心に応えられた。具体的な作業については、研究開発室の寺井仁

助教の働きが大きかった。きれいに仕上がった複製は、だれでも手軽にめくって見ることができたので、上のアンケートにもあるように、参観者からは大きな賛辞を寄せていただいた。主催者一同、心から安堵した次第である。

また10月6日には、プリンストン大学名誉教授の余英時先生（中国思想）(写真3)も参観された。たまたま日本中国学会の講演のために来学されていたのである。展示室を熱心にご覧になる様子は、同行していた香港テレビにより取材されていた。“世界の傑出華人シリーズ”というドキュメンタリー番組で、20余人を選び、紹介するのだという。この放送を通して本学の青木文庫も取り上げられるとは、何という幸運だろう。

さわやかな秋晴れの日、講演会も大好評だった。来場者は70人、会場はいっぱいになった。お一人は、「京都新聞」に二年間にわたり(03.9~05.7)、「陶然自楽—青木正児の世界」と題して長期連載した、文化報道部の永澄憲史記者の報告。新聞連載の取材現場を髣髴させる熱っぽい口調に、聴衆は大いに魅了された。また本学の井上進教授の学殖豊かな話も、縦横無尽な語り口の冴えもあって多大な感銘を与えた。講演終了後、会場に充満した熱気がそれを物語っている。

今回の特別展を機に、青木文庫を長年守って来られた中国文学講座の今鷹真名誉教授や、杉山寛行副総長らの思い出話も拝聴でき、これまでのご苦勞のほどが思いやられた。また東北大の花登正宏教授からは、今年あたり中国の出版社から「北京風俗図譜」の複製本が刊行される予定との近況もお聴きした。青木博士の「遊心」



写真2 『戯単』 青木が集めた中国の芝居のプログラム 29枚を綴じた稀有な資料



写真3 図録にサインされる余英時先生

の心が、次々に人々の輪を繋いでいくようだ。

さらに青木特別展は、海を超えてはるか外国にも紹介された。というのは、11月22～25日にわたり、西安の陝西師範大学にて本学との共催による「中日文化交流的歴史記憶与展望 国際学術研討会」が開催され、私もそれに参加。発表した内容がこの青木特別展だったのである。写真35枚をパワー・ポイントで示しながら中国語で解説したが、これまた反響が大きかった。質問が相次ぎ、青木文庫への関心の高さを感じた。閉幕後、中国側としてはぜひこの報告を図版入りで出版したいとの意向であることもお聴きした。その日がもし本当に来るのならば、本学にとってまた青木先生にとっても、どんなに嬉しいことかと思った。「『遊心』の祝福」に関わる全行事を終えてみると、私自身もまた青木学の祝福を存分に受けたと実感され、西安の大雁塔にかかる月を仰ぎつつ博士の偉大な足跡を偲んだ次第である。

青木没後、40余年経ってもなおその輝きを失わない、「青木学」の魅力の世界。その概要は図録に書いたとおりだが、ここで改めて考えてみたい。青木の文芸論の特色は、一言でいえば文学という伝統的なテキストばかりでなく、絵画や音楽・書・芝居などをも含む、いわばその総合性に真髓があるといえる。それはまた青木の脱俗的文人趣味とも深く結びついて、汲めどもつきぬ泉のごとき豊潤な情調をたたえながら、彼一流の魅惑の読解を次々に展開した。今風にいえば斬新なテキスト学的手法そのものだが、これが当時の中国文学界の話だということだから、まさに青木の天性によるスタイルというしかない。

それを一例でもって語るならば、青木の絶筆『李白』に象徴的に示されている、と私は考えている。李白の訳注は相当数出回っているが、青木の『李白』が断然李白らしい。その選択はじつにきわだっている。かつ青木の訳詩が李白の風貌と見事に調和しているから、全編、どの詩を読んでも眼前にすぐ詩人李白が現れてくる。ほかにもすぐれた訳注書はあるが、学術書として作品選択上、公平さを重んじたためであろう。様々な内容をバランスよく採択した結果、強烈な個性をそいでしまった面がある。一方、

青木訳『李白』となると、自身の好む典型的な李白らしい作品ばかりを取り上げ、ほかは目もくれない。

紙数の関係で短い作品を紹介するしかないが、いま青木の訳文を改行して掲げる。

「月の下に独り酌む四首」其一

花の下で一壺の酒を 独りで酌んで相手は無い
盃を挙げて明月の昇るを迎へ 我と影とで三人
に成った

月は もとより酒を飲まず

影は ただ我身に随^ついてゐるばかり

暫く月と影とを引きつれ 春をのがさず行楽し
よう

我歌へば月は いざよい 我舞へば影は乱れる
醒めてゐる時は共に交歓し

酔うた後は それぞれ別れ去る

永く無情の交りを結ばんと

遙かに夜の河^{あまがわ}を指して再会を約する

青木は歌舞音曲や芝居を好んだ。当然、酒またしかり。李白の詩を選ぶ時も、その嗜好は同じである。ここには吞兵衛でかつ歌う李白が出てくる。我と月と影の三人での宴会は、まるで芝居である。それを描写する詩もさながら絵画のようだ。青木の選ぶ李白の詩は、すべからくこの調子である。すなわち彼の文芸観とは、詩画曲劇や風俗学などが混然となった「遊心」の多様なフォルムの読解にあるのであり、その意味で早すでに今日的なニュー・テキスト学を見通していた感がある。

『李白』を書き終えた青木は、風とともに忽然と彼方へ去っていった。「太白峰に登る」詩の青木訳にいう、

願はくは輕妙なる風に乗って去り

真直ぐに浮雲の間を抜け出で

手を挙げれば月に届きさうで

前に行けば山も無きが如くでありたい

一たび此の武功^{むこう}の地に別れて去ったならば

何時復た更^{いつ}に還^{かへ}って来るであらうか

〔此のまま登仙してもう還らぬであらう〕

(かとう・くにやす 文学研究科教授)

永井文庫 (近代イギリス経済学史・思想史) について —概要と保存対策—

中井 えり子

はじめに

永井義雄名古屋大学名誉教授 (1931-) の蔵書が平成 19 年度に中央図書館に寄贈されました。永井先生は、1959 年 3 月に名古屋大学大学院経済学研究科博士課程満了後、名古屋大学経済学部助手に採用され、名古屋市立女子短期大学、金沢大学を経て、1981 年 4 月から名古屋大学経済学部教授、1990 年 4 月からは一橋大学社会科学古典資料センター教授を歴任されました。その間、1963 年に名古屋大学で経済学博士の学位を取得され、その後 1995 年 4 月から 2002 年 3 月まで関東学院大学経済学部に勤められ、現在に至っています。

所属されている学会は、経済学史学会、ロバート・オウエン協会、マルサス学会、日本イギリス哲学会、The International Society for Utilitarian Studies 等、9 学協会に及びます。主著に『ベンサム』(研究社 2003)、『近代的理念の移入と屈折：日本と東南アジアにおける西欧近代』(白桃書房 2002)、『自由と調和を求めて：ベンサム時代の政治・経済思想』(ミネルヴァ書房 2000) などがあり、共著・翻訳書も多数あります。

中央図書館へは平成 18 年度に永井先生より寄贈のお申し出がありました。その際、西洋初期刊本以外は、永井先生の蔵書印を押印したうえで、一般図書として NDC (日本十進分類法) に従って配架し、西洋初期刊本及び書簡類を「永井文庫」として貴重書室に納めるということで、平成 19 年度に正式にご寄贈いただきました。

永井文庫の概要

寄贈された図書は、一般書約 5,700 冊 (和書 3,900 冊、洋書 1,800 冊) と、主として 1850 年以前の西洋初期刊本約 600 点で、この西洋初期刊本と後で紹介する自筆書簡を含む「永井文庫」全体を平成 20 年度に貴重図書の指定をする予定です。

「永井文庫」は、バーク (Edmund Burke,

1729-97)、ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832)、オウエン (Robert Owen, 1771-1858) 等の近代イギリス経済学史・思想史関連の 18 世紀及び 19 世紀の著作物を中心に、それ以降の研究書及び関連分野の洋図書、及びパンフレット類から成り、ホップズ・コレクションやリトルトン・コレクションを補完・増強するコレクションです。

中には、ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) の『ユートピア便り』(News from Nowhere. Kelmscott Press, 1893) (写真 1) やベンサムの自筆書簡 (写真 2) 及びウィルバーフォース (William Wilberforce, 1759-1833. 奴隷貿易反対論者として有名なイギリスの政治家) の自筆書簡やレイバー・ノート (労働紙幣) などの珍しい資料も含まれています。



写真 1 『ユートピア便り』

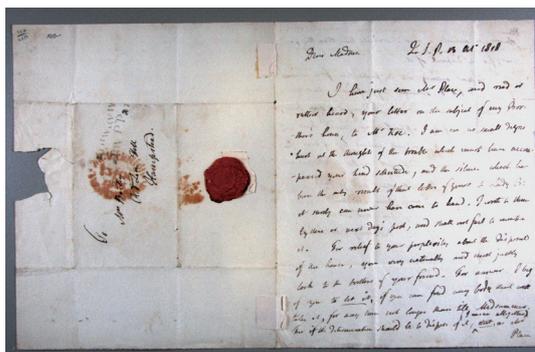


写真 2 ベンサムの自筆書簡 (1818 年)

保存対策

「永井文庫」は保存状態に問題がある図書も含まれており、今後の管理、利用や展示会出展などにも耐えられるよう、簡単な保存対策をしました。以下は、一橋大学社会科学古典資料センター開催の「西洋古典資料保存講習会」（以下、資料保存講習会）で指導されている岡本幸治氏（アトリエ・ド・クレ主宰）の実習時に配布される資料、及びアンソニー・ケインズ [ほか] 著『「治す」から「防ぐ」へ：西洋古刊本への保存手当て』（日本図書館協会 1993 『シリーズ本を残す 5』所収）によっています。

【封筒フォルダー】

「永井文庫」には 1790 年前後のパンフレットが 170 点余り含まれ、その大半がかつて製本されていたものの綴じがはずされた (disbound) もので、表紙が裏表ともついていません。これらのパンフレットについては、封筒フォルダーを 2 種類（厚さが 6 mm と 0 mm）、資料保存講習会の仕様に従って¹⁾ 特注しました。表紙は A F ハードボード 0.63mm を、封筒部分には A F エンベロップを指定しました。パンフレット類すべてのサイズを測った結果、大半が A 4 サイズか B 5 サイズのどちらかに納まると判断し、経費節約のため、各々の厚さのものを A 4 と B 5 の 2 種類のサイズとしました。A 4 サイズより大きいものは別注しました。写真 3 は、B 5 サイズの保存フォルダーにパンフレットを納めたものです。



写真3 封筒フォルダー

【保革油】

劣化した革装本には、柔軟性を回復し長く使うための耐用性を高めるための措置が必要です。準備するものは、植物タンニンなめし革の表面を強化するための H P C のアルコール溶

液、及び保革油²⁾ として Marney's Conservation Leather Dressing と仕上剤の SC6000 です。保革油と仕上げ剤は輸入品で古書店を通じて購入しました。そのほかに H P C を塗るための油彩用平筆と保革油を塗るための毛羽のないやわらかい布（使い古しの T シャツなど）が必要です。

【保護ジャケット】

革装本で表紙の劣化の激しいものや、表紙がはずれたものは手の汚れを防いだり、痛んだ部分を保護するために保護ジャケットをかぶせます。厚いジャケットと薄いジャケット³⁾ の 2 種類があります。前者は A F プロテクト H 209³-g/m² を、後者は I L ティッシュの平版を使用して、表紙が片方のみはずれた本を保護するジャケット（写真 4）を作ることになりました。用紙サイズは、次のとおりです。

ジャケット用紙天地 = 本の天地 × 2

ジャケット用紙左右 = 本の左右 × 5 + 本の厚さ（余った紙は切り落とします）



写真4 表紙が片方のみはずれた本を保護するジャケット

【修復】

18 世紀以前の図書で、背表紙がこわれていたり、製本の糸がゆるんで綴じ直しが必要なものなど専門家による修復が必要な図書もあり、予算の確保が今後の課題です。

「永井文庫」を含めて、永井先生からご寄贈いただいた図書等はすべて平成 19 年度内に目録登録が終わる予定で、今年の秋には展示会も予定しています。詳細は決まり次第、図書館ホームページや『館燈』等でお知らせします。

「永井文庫」の保存を検討するに当たり、一橋大学社会科学古典資料センターの皆様大変お世話になりました。この場を借りて御礼を申し上げます。

<注>

1. 平成 19 年度の資料保存講習会では市販の保存

《利用者から見た図書館》

図書館探検のススメ

高橋 めぐみ

私は、中央図書館の書架整理をしています。週に2日。12月から始めました。

私が担当しているのは参考図書ですが、友人に話すと「それってどこ?」と聞き返されることもしばしば。学部の1年生には、少々縁遠い場所なのです。とはいえ、私も友人に偉そうなことは言えません。書架整理を始める前の私も、きっと同じ答えを返していたでしょうから。

以前の私は、2階のゲートにカードを通して、迷うことなく右に曲がり階段を駆け上り、3階に上がると一直線に科学分野の本棚へ行っていました。ですから、そのときに「2階には何があるの?」と聞かれていたら、首を捻ってしまっていたと思います。私のように極端ではないとしても、図書館に通っている方なら、自分のよく行く場所、というものが決まってくると思います。そして、それ以外の場所となると、あまり知らないことが多いのではないのでしょうか。

参考書架は中央図書館では2階の奥にあり、辞典、年鑑、白書などが並んでいます。確かに、調べる目的が無ければ、足を運ぼうとは思にくい響きです。そこにあるのは、私が産まれる前に出版された本が大半。当然、新品の綺麗な本ばかりではありません。背表紙がはがれたり、ページが抜け落ちてしまう憂き目に遭いながらも、度重なる修復を施され、静かに利用者を待っています。ところが、中には、一体何年読まれていないんだろう? と思ってしまうくらい埃を被っているものもあります。やはり参考書架は、学部生には近づきたいところなのかもしれません。

こんなことを書くと、参考書架にはひどくつまらないものしかないように思われるかもしれ

ませんが、そんなことはありません。私は、書架の整理をしながら、題名も見ていくのですが、堅苦しい本だけではないことに気がきます。『暗号事典』、『架空人名辞典』なんていう辞書もあります。こんな本があるんだ! と、新しい発見をしたような気分になります。『英語スラング辞典』『隠語辞典』など、少し怪しい辞典もあります。思わず、本を開いて覗いてみたくなってしまいますよね。難しい勉強の息抜きにも使えそうです。

図書館の良いところは、様々な本が一箇所に集まっているところだと思います。考えてみれば、これだけいろいろなジャンルの知識が集結した場所、というのは、図書館以外にないのではないのでしょうか。この場所を、ほんの一部しか使っていないなんて、宝の持ち腐れ、と言われても仕方ありません。かつての自分に、「なんてもったいないことしてたの!」と言ってやりたいです。

本を読めば、知識が増えて見識も広がり、いいことづくめ。それは分かっているけど、なんだか気分が乗らない。そんなときは、背表紙だけでも眺めていれば、面白そうな本に出会えるはずです。

図書館へ行くと、つい、自分の専門分野の書籍に目が行ってしまいがちですが、他の分野の書架も探してみると、面白い発見があります。いつも見ている本棚の向こう側には、全く違う世界が広がっているかもしれません。宝探しをする気分で、図書館を探検してみたいのではないでしょうか。

(たかはし・めぐみ 理学部1年)

名古屋大学附属図書館友の会「トークサロン ふみよむゆふべ」開催のお知らせ

第11回 平成20年3月4日(火)午後6時～ 中央図書館5階多目的室
「名著『字源』の著者・簡野道明の若き日の足跡を訪ねて」
かたり 加藤 国安氏(名古屋大学大学院文学研究科 中国文学)

会員以外の方も参加できますのでぜひお越しください。申込みは不要です。

本学教員著作物の寄贈リスト

中央図書館では、教員著作物等を積極的に収集しています。平成19年10～12月は下記の図書を寄贈していただきました。ここにあらためてお礼申し上げます。

(寄贈者の敬称は略します。)

所 属	寄贈者名	寄贈資料名	資料 I D	配置場所
教育発達科学研究科	渡 邊 雅 子	納得の構造：日米初等教育に見る思考表現のスタイル / 渡辺雅子著 - 東洋館出版社, 2004.9	11601605	中央学 376.2/W
教育発達科学研究科	渡 邊 雅 子	叙述のスタイルと歴史教育：教授法と教科書の国際比較 / 渡辺雅子編著 - 三元社, 2003.12	11601604	中央学 375.32/W
教育発達科学研究科	速 水 敏 彦	他人を見下す若者たち (ハングル版) (그들은 왜 남을 무시하는가 / 하야미즈 도시히코저; 김현혁역 그들은 왜 남을 무시하는가)	11607132	中央学 372/H
法 学 研 究 科	大 屋 雄 裕	自由とは何か：監視社会と「個人」の消滅 / 大屋雄裕著 - 筑摩書房, 2007.9	11601606	中央学 S 081/O
経済学研究科	家 森 信 善	基礎からわかるマクロ経済学 / 家森信善著 - 中央経済社, 2007.4	11603962	中央学 331/ Y
経済学研究科	家 森 信 善	基礎からわかるミクロ経済学 / 家森信善, 小川光著 - 中央経済社, 2007.4	11603961	中央学 331/ Y
工 学 研 究 科	佐 藤 一 雄	大学版：創造性モノづくり実習マニュアル：製作図面 CD 付 / 佐藤一雄編著 - 名古屋大学創造性モノづくり教育研究会, 2007.10	11605178	中央学 507/Sa
環境学研究科	林 上	現代都市地域の構造再編 / 林上編著 - 原書房, 2007.10	11603373	中央学 318.7/ H
国際開発研究科	西 川 芳 昭	地域文化開発論 / 西川芳昭著 - 九州大学出版会, 2002.10	11603972	中央学 601/ N
国際開発研究科	中 西 久 枝	日本で学ぶ国際関係論 / 初瀬龍平, 野田岳人編 - 法律文化社, 2007.10	11607274	中央学 319/H
国際開発研究科	浅 川 晃 広	移民国家ニッポン：1000万人の移民が日本を救う / 坂中英徳, 浅川晃広著 - 日本加除出版, 2007.10	11607423	中央学 334.41/Sa
国際言語文化研究科	上 原 早 苗	トマス・ハーディ全貌：日本ハーディ協会創立五〇周年記念論集 / 日本ハーディ協会編 - 音羽書房鶴見書店, 2007.10	11607228	中央学 930.28/N
国際言語文化研究科	松 岡 光 治	ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化：生誕百五十年記念 / 松岡光治編 - 溪水社, 2007.11	11608284	中央学 362.33/Ma
水循環研究センター	坪 木 和 久	Numerical prediction of high-impact weather systems : the textbook for Seventeenth IHP Training Course in 2007 / Kazuhisa Tsuboki and Atsushi Sakakibara - United Nations Educational Scientific and Cultural Organization, 2007	41441900	中央図 451/T
名 誉 教 授	瓜 谷 郁 三	植物逆境生物化学及分子生物学：着重熱帯薯類 = Biochemistry and molecular biology of plant stress : focusing on tropical starchy roots / 瓜谷郁三編著；谢国生，李合生主译 - 中国农业出版社, 2004.3	11602407	中央学 616.8/U
名 誉 教 授	瓜 谷 郁 三	カワセミ：後田池のドラマ / 伏木敏郎, 伏木真喜子著；伏木真喜子編集 - 豊川：伏木敏郎, 2007.10	11602406	中央学 488.93/H
名 誉 教 授	金 田 敏 郎	ロマノフ王朝秘録：医学的なアプローチ / 金田敏郎著；ロマノフ王朝秘録刊行会編 - 同時代叢書, 2007.10	11606691	中央学 238.07/Ka

《自著紹介》

『自由とは何か：監視社会と「個人」の消滅』（大屋雄裕著 筑摩書房 2007年9月）

たとえば住基ネットや監視カメラの是非をめぐって、「国家による監視の強化で我々の自由

が失われる」という議論がよく聞かれる。だが、では実際に監視カメラによって犯罪が無事摘発された例をどう説明するのだろうか。国家による監視はある程度我々の役に立つし、我々の生命・安全・自由を守るものではないか。そのような、少なくとも私にとっては至極当然の発想

から、監視と自由の関係について論じようとしたのがこの本である。

「監視社会の恐怖」は実在するのか、あるとしてどのような恐怖なのか。私の結論は、むしろ監視が親切であること、我々の自己決定に先立って我々を保護し・幸福を与えようとするのが、主体としての「個人」という近代の社会制度が前提としてきた観念を掘り崩すことにつながっているというものである。事後的に制裁を加えるために用いられる監視は、その情報が悪用されない限り我々の自律性を傷つけない

し、悪用防止のために求められるのは監視者を監視すること、つまり監視の強化である。重要なのは監視の使われ方であって、監視することそれ自体ではないのだ。

従来の監視社会論が見逃していた要素を指摘することで、新たな展望を開くことはできたのではないかと思う。今後は、ではいかなる監視・制度が必要であり許容されるのかといった課題を追求していきたい。

(おおや・たけひろ 法学研究科准教授)

2008年春季特別展のお知らせ

附属図書館 2008 年春季特別展「濃尾の医術 —尾張藩奥医師野間家文書を中心に—」

附属図書館で所蔵する尾張藩の奥医師野間家に伝わる医学・薬学関係の古文書を初公開いたします。

それと同時に、尾張・美濃などの幕末維新期の医療活動に関わる大塩家文書、高木家文書などや、伊藤圭介関連の資料なども展示し、当時の人々の医療への関心がどのようなものであったかを考えます。

日 時：2008 年 4 月 14 日（月）～5 月 2 日（金） 毎日 9 時 30 分～17 時（土日祝日も開室）

場 所：中央図書館展示室（4 階）ほか

講演会：4 月 19 日（土）13:00-15:30

講演者：酒井シヅ氏（順天堂大学客員教授）、演題未定

豊田講堂改修竣工記念 貴重書展示会を開催

豊田講堂改修竣工を記念して、平成 20 年 2 月 2 日（土）に豊田講堂 3 階で「『名古屋大学学報』の表紙を飾った貴重書」と題して、本学が所蔵する貴重な資料を展示しました。中央図書館から、江島其磧著『浮世親仁形氣』、『さころも』、起北齋輯『繡谷春容』、ホップズ『リヴァイアサン』（初版 3 種）、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』、一惠齋芳幾画・山々亭有人文『豊饒御蔭参之図』、伊藤圭介編『錦窠植物図説』、伝 J. M. Wright 画「ホップズの肖像画」、医学部分館から柴田芳洲画「明治初年愛知県公立病院外科手術の図」、文学研究科から「固関勅符」「正親町天皇繪旨」（真継家文書）、生命農学図書室から伊兵衛著『増補地錦抄』（石井文庫）ほか、経済学図書室からアダム・スミス『国富論』、マルクス『資本論』、数理科学図書室から『ユークリッド全集』、『ヒルベルトのものと思われる書き込み』を出展しました。会場には 1,000 名以上が訪れ、『リヴァイアサン』や『ブリタニカ』などの購入に関わられた水田洋名誉教授が飛び入りで解説されると熱心に質問する入場者や、普段見ることのできない初版本が母校にあることに感嘆する卒業生などがいて、非常に盛り上がった展示会となりました。



会場風景
(入場者に解説する水田名誉教授)

お知らせ

☆ 中央図書館の書架整理日の廃止（試行）に伴う開館予定について

ー中央図書館の開館日が増えてご利用しやすくなりますー

中央図書館ではサービス向上のため、毎月の書架整理のための休館日廃止を検討した結果、書架整理を開館日に行うこととし、昨年12月から今年2月までの休館予定日を通常開館することになりました。

今年度内は3月27日(木)を除いて開館しますので、休館日をあまり意識することなく、ご利用いただけます。この試行で支障がなければ、平成20年度も引き続き一年間試行し、東山キャンパスの停電日と年末年始を除き、特別な事情(台風、大規模工事等)がない限り継続して開館して、利用環境の向上を図る予定です。

☆ 中央図書館の利用細則の変更について（2月1日）から

- ・視聴覚資料（禁帯出のものを除く）の貸出 1人1セット7日以内 → 同14日以内

☆ 中央図書館4階サテライトラボ（情報メディア教育センター）の機器更新に伴う閉室について

平成19年12月22日～平成20年3月末日まで、中央図書館のサテライトラボとPCコーナーの情報接続設備（情報コンセント及び無線LAN）が利用できません。ご不便をおかけしますがご協力をお願いします。

☆ 医学部分館保健学図書室の土曜日の開室サービスの開始について

平成19年10月6日（土）より、土曜日15時10分～18時50分まで開室しています。ただし、春・夏・年末年始の学生休業期間中は除きます。

☆ 太陽地球科学研究所図書室の移転について

同研究所の豊川キャンパスから東山キャンパスへの移転にともない、図書室も以下に移転します。2月中旬のサービス開始を予定しています。

移転先：共同教育研究施設1号館101号室

電話番号：052-747-6467 Fax番号：052-747-6313（代：研究所事務室）

☆ 環境医学研究所図書室の電話番号の変更

図書室（電話）：(旧) 052-789-3860 ⇒ (新) 052-789-3995 (Fax 052-789-3887 は変更なし)

中央図書館常設展「2008冬展 物語文学を読んでみよう Part.2」

平成20年1月4日（月）～3月31日（月）毎日9時30分～17時（土日祝日は閉室）

展示資料：竹取物語、伊勢物語、源氏物語、枕草子絵巻、栄花物語、紫式部日記絵巻、北野天神縁起絵巻、大和物語、車僧草子、住吉物語、平家物語、太平記、西行物語、落窪物語、唐物語ほか

◆◆◆◆◆ [行事等] < 19. 10. 6 ~ 20. 1. 5 > ◆◆◆◆◆

- ・ 附属図書館2007年秋季特別展「『遊心』の祝福ー中国文学者・青木正児の世界ー」<10/1-19>、同講演会<10/13>
- ・ 中央図書館秋季利用ガイダンス（於：中央図書館）<10/23-11/9>
- ・ 東海地区大学図書館協議会図書館職員基礎研修（於：中央図書館）<11/28>

- ・ 第5回東海地区CSI事業報告会（於：中央図書館）<11/30>

編集委員会

中井えり子（委員長）西尾哲也（中）長野祐子（中）水野牧子（中）早川沙耶華（文学）中村啓子（経済）菊池有里子（数理）加藤淳一（工学）